

としょかんだより 第107号

| 2016年 12月開館予定表 | | | | | | |
|----------------|----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
| | | | | 1 | 2 | 3 |
| 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |
| 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 |
| 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 |

| 2017年 1月開館予定表 | | | | | | |
|---------------|----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 |
| 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 |
| 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 |
| 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 |
| 29 | 30 | 31 | | | | |

| | | | |
|--|-------------|--|-------------|
| | 9:00-20:00 | | 9:00-17:00 |
| | 13:00-20:00 | | 13:00-19:00 |
| | 休館日 | | 9:00-19:00 |

図書館イベント情報

平成28年度 第1回 図書館戸田茶話会



日 時：12月20日（火）
17:00～18:00

場 所：図書館閲覧室

問合せ先：高野山大学図書館

(0736-56-3835)

どなたでもご自由に参加いただけます。
ぜひ、お越しください。

クリスマスコンサート



12/6(火)閲覧室におきまして浦上知子さんによる電子ピアノのコンサートを開催しました。

クリスマスにちなんだ8曲の演奏をしていただき、参加者全員による合唱後のアンコールで終了いたしました。

皆様のご参加どうもありがとうございました！！

図書館古本市ご報告

11月6日に図書館にて開催した図書館古本市の売上金額を報告します。



売上金額 10,300円！！

売上金はすべて熊本地震の義援金として寄付いたします。皆様どうもありがとうございました！



発行所

〒648-0280

和歌山県伊都郡高野町

高野山 385

高野山大学

図書館閲覧室

T E L : 0736-56-3835

F A X : 0736-56-5590

twitter : @koyasanlib

E-mail

service-lib@koyasan-u.ac.jp

良寛

図書館長 前谷 彰(恵紹)

焚くほどは風がもてくる落ち葉かな

(句意)

焚き火をするぐらいの落ち葉は風がちゃんと運んでくれるものだよ

(解説)

良寛さんは宝暦八年（一七五八年）、越後出雲崎（現新潟県出雲崎町）の名主の家に生まれ、幼名を栄蔵といました。十八歳の時、名主見習役になりますが、家督を弟の由之に譲り、尼瀬の光照寺の玄乗破了のもとで剃髪。二十二歳で曹洞宗・国尚和尚について得度し、備中玉島の円通寺に入って仏道修行に励みます。しかし、三十八歳のとき、父である以南が桂川に投身自殺。この事件を機に帰郷し、郷本の空庵に仮住まいをし、四十歳で国上山の五合庵に入り、四十八歳の時から定住し、天保二年（一八三一年）に七十四歳で死去します。良寛さんは生涯、名誉や財産や地位を求めず、隠遁僧として自然を愛し、山中独居・乞食行脚の生活を実践しながらも、人々に難しい説法をせず、ひたすら質素な生活に身を委ね、その大切さを短歌や俳句、漢詩によって分かり易く伝え高僧です。その生き様は良寛さんが生きた時代のみならず、現代に生きる人々の共感も得て、誰もから「良寛さん、良寛さん」と呼ばれて親しまれているのです。

この句が詠まれたのは五合庵なのか、同じ国上にある乙子神社の近くの庵なのか、そんなことはどうでもいい。少年はやはり寂しがり屋で、誰かがそばにいてくれないと生きては行けない。良寛さんは生涯、そんな少年だったのです。十一月ともなれば、雪が舞う極寒の季節がやって来ます。身体を暖めるために焚き火をしようと、ほうきを手に良寛さんはふと庭の木に目をやったのでしょ。すると、冬の風が瞬く間に焚き火ができるほどの落ち葉を地面に運んでくれる。「寒くなって、庵を訪れる人も少なくなったが、冷えた身体と心を暖めてくれる焚き火のもととなる落ち葉を、風がちゃんと運んでくれるのだ」と思いながら、この句を詠んだのでしょ。

でも、寂しがり屋の良寛さんは、その落ち葉に、庵を訪れてくれる友の姿を投射していたに違いありません。俊才の譽れ高く高德の僧であった良寛さんですが、生涯寂しがり屋で、あかたれの無垢な少年の心を持ち続けていたからこそ、時代を超えて親しまれ、愛され、癒され、めざませてくれる「良寛さん」なのではないでしょうか。